

中国の南京国際セミナー報告 「南京を思い起こす 2009—戦争によるトラウマの世代間連鎖と 和解修復の可能性をさぐる」

金 恵玉（立命館大学社会学研究科、社会学博士）

本報告者は、2009年10月6日（火）から11日（日）まで中国の南京師範大学で行われた「南京を思い起こす 2009～戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性をさぐる～」の国際セミナーに参加した。このセミナーに参加することになったきっかけは、2007年に立命館大学で行われた「心と体で歴史を考える会」という試みである。歴史トラウマを「表現アーツセラピー」や「ドラマセラピー」、「プレイバックシアター」という心理的・芸術的方法を使って解決するやり方から新鮮な感銘を受けた。また、2007年8月アメリカのサンフランシスコで行ったワークショップに参加し、プログラム担当者であるアルマンド・ボルカスさんから「表現アーツセラピー」や「ドラマセラピー」の内容をさらに学んだ。そして、2008年7月に、再び立命館大学で日本人学生と韓国や中国の留学生と共に、歴史トラウマのワークショップ・プログラムに参加して、このプログラムは、平和教育の実践方法として有効な価値を持っているものであると考えるようになった。

今回、国際セミナーとして行った場所である南京師範大学は、107年の歴史を持ち、現在3万人以上の学生が通っている。南京大虐殺のときに、この大学は1万人以上の女性難民を受け入れ、ミニニー・ヴォートリン（Minnie Vautrin）というアメリカ人女性が難民の女性たちに宗教的次元で心理治療を行ったところであり、国際安全区域だったこともよく知られている。このような歴史的意味を持つ所で戦争によるトラウマ問題を解決する方法を学ぶことはとても意義があると思えた。

この国際セミナー参加体験に関する報告では、筆者の研究分野である平和教育や平和研究の観点からHWHプログラムの方法、セミナーの全体評価と課題

について論じたい。

今回のセミナーは、異なった戦争体験と教育を受けた日本人、中国人が、日中戦争と南京の悲劇について共に学び、心を開き、お互いの声を深く聞くことを目的としていた。また、参加者たちが、記念館見学、生存者の証言などを通して日中戦争と南京の悲劇について共に学び、感じる事を分かち合い、過去の戦争が現在の私達の社会や自己のアイデンティティにどのような影響を与えているか、また、私達はそのような過去を越えて、平和な未来のために何ができるのか、ドラマセラピーや表現アートセラピーの手法を使いながら、共に感じ、考えていくことを目的として準備された。

日本から心理学研究者と大学院生、経済学部生、平和教育研究者である報告者を含め13人、中国から歴史学・心理学研究者と大学院生、日本語研究大学院生を含め10人、アメリカから心理学セラピスト2人が参加した。そして中国語・日本語・英語の通訳担当者らも含めて毎日午前9時から午後5時までセミナープログラムが進行された。

主なプログラムは、今回の企画の意義についてそれぞれの立場から張連紅(中国)、村本邦子(日本)が発表し、アルマンド・ボルカス(Armand Volkas、米国)の研究報告、2007年度セミナー参加者学生からの報告、2009年度参加者自己紹介、南京記念館見学、南京大虐殺の事実と課題に関して美術の手法を利用したグループ・ディスカッション、HWH(Healing the Wounds of History: 歴史の傷を癒す)プログラムとしてドラマセラピーや表現アートセラピーの手法を利用したワークショップ、生存者の証言、燕子磯記念碑の慰霊セレモニー(黙祷および献花)、セミナー体験の統合は参加者全員の粘土作品を通じて表現すること、プログラムの全体評価として各自の意見を聞く、という流れで行われた。

今回セミナーのプログラムにおいて、重要な部分を占めた「HWH」という方法は、戦争、暴力を受けた人たちを治療することが目的で、人々の痛みを癒すこと、トラウマを持つ人々が日常生活をどう過ごすのかを教える。いかにすれば、戦争の痕跡を治すことができるだろうか。まず、人間の心の傷を癒すためには、政治的政策として、社会構造を直すこと、歴史研究の中で史実、真実をはっきりとさせることが必要である。

トラウマの精神的解決は、心理的に考えなければならないことである。そのため、心理的に解決する HWH の方法をいくつか提示しよう。HWH の方法を実践しているアルマンド・ボルカス氏は、文化間の対立を心理学的方法で解決する方法として、「ドラマセラピー」や「ロールプレイング」というアート表現を主に活用する。彼は、トラウマを解決する方法の一つは、トラウマにおける自己のアイデンティティを探求することをあげている。これは自分のアイデンティティが社会に影響を受けていることを理解する学習である。

二つは、他者との深い関係性を作ること。つまり、自分の感情・気持ちを表現することである。三つは、誰もが加害者になる可能性があることを認識する。

さらに、ボルカス氏は、今回の HWH のワークショップにおいて、まず、集団で歴史的対話をするためには、歴史のタブーを破ることが重要であると言った。つまり、暗黙的な歴史承認の問題を自覚することが必要である。そして、互いの物語に耳を傾けること、つまり、共感する文化を創ることが重要なのである。さらに、お互い間の安全と信頼ができると、加害者と被害者としての立場から、対話をすることができる。その対話を通じて、深い痛みや悲しみを共有することができるだろう。ただ、これにはまず心を開くことが必要であるとボルカス氏は言った。

また、彼はトラウマに対する理論的な解決をするのではなく、意味を見出すことが重要だと強調した。なぜなら、体験に意味を見出すことができなければ、またトラウマになる可能性があるからであるという。トラウマの体験を受け入れ、自分の感情（美しさ、悲しみ、苦痛、怒り、喜びなど）を表現することで意味を見出していくことが重要であるといえる。

自分の感情を表現する方法であるドラマセラピーの中のサイコドラマという手法では、基本的に三つの規則があるようだ。一つは、質問しないこと。二つは、批判しないこと。三つは、分析しないことであるとボルカスは提示した。つまり、表現する人の感情をそのまま受け入れる感覚や姿勢が必要である。「表現アーツセラピー」や「ドラマセラピー」は、歴史の苦痛と痛みを体と心を通じて表現し、トラウマ問題を解決する方法として活用されている。ボルカスは、「平和を作るということは、他人の気持ちが分かる人を育てる。つまり、共感的な文化を創るということである」と提言する。アートは目に見えないものや言

葉にならないことを感じ取れる形にし、多様な民族や宗教の枠を超えて、人々が共感を体験できる時空間を作り出す力を持っている。コミュニティの治療力は、共感する力である。さらに、彼は、「歴史上起こったことへの怒りや悲しみがコミュニティの中で十分に表現されないと、それらの感情は亡霊となって私たちの生き方や民族間の関係、コミュニティのありように影響を与える」といった。

実際、戦争に対する暴力から生み出されたトラウマは、今もずっと残されているものである。暴力によるトラウマは永遠になおすことはできないが、治すための解決方法を探ることが必要である。残酷なトラウマ、特に大虐殺やジェノサイドのような暴力性は社会的にも大きく影響をもたらしているということを知ることが重要である。しかも、過去の歴史トラウマと現在のトラウマの連携性、例えば、アフガニスタン戦争やイラク戦争のような問題と繋がることについての考え方も必要であろう。

戦争が作る環境、社会構造にも問題がある。人間性からみれば、人間は善悪両面を持っており、実際、戦争にかかわってしまったら、人々は全く別人になるという問題がある。また、軍事制度の中では、上司の命令に抵抗すると、自分が殺されるという恐れがある。人を殺すようになる軍事システムの問題点をより深く考えることが必要である。

南京大虐殺の生存者（Chang Zi-qiang）は、「10歳の時に自分の目で家族が日本軍に殺されたことを見た。南京大虐殺はまるで昨日起きたように、常に日本人たちに対して恨みを持って生きてきた。1980年代の時に、テレビで日本の右翼たちが歴史を歪曲する姿をみて怒りを感じた。日本人が歴史に対して嘘をつくことをみて、悔しくて眠れなかった。そして、南京記念館に行って自分の体験を直接証言した」と言った。また、「南京大虐殺は、私だけではなく、南京のみんなに傷を残しており、私は傷の記憶でいつもつらくて悲しみの気持ちでずっと生きている。私がつらい記憶の話をするのは、二度と戦争が起こらないよう願うためである。人間は、30万人も、3万人も、3人も、1人も殺してはいけないよ。良い国や政府を作ることが重要であり、歴史の事実をありのままに伝えることが重要である」と語った。

このような証言を通じて、過去の歴史をどのように見、過去の歴史から何を

学び、今日の状況の中で我々が選ぶ方向を決めることが意味を持っているといえる。過去の膨張主義記憶や残酷な戦争の記憶を抹殺しようとする日本政府への警告として、抗議として、個人から始まる戦争歴史の反省と謝罪の姿勢がより明るい未来を作っていくことができるだろう。

今回のセミナーに関する全体的な評価と課題をみると、まず、中国の参加者からの評価においては、

- ・今まで自分の表現とは言葉で話すことだったけど、今回のプログラム参加によって、多様な表現の方法を学ぶことができた。特に、芸術的な手法を通して自分の気持ちを多様な方法で表すことができ嬉し。これからより多様な方法を持って表現する活動が重要である。
- ・中国としてのアイデンティティがはじめてできたこと、心の中にはそんなに悲しくなかったのに、体が先に悲しくなって涙がぼろぼろ出てしまった。
- ・生まれた中国で日本人と共に交流した感動をお母さんに伝えたい。そして、HWHのプログラムを通じて、感情を統制し調整する難しさを感じた。
- ・自分のつらさ、痛みをずっと感じたが、このワークショップを通じて、自分の気持ちや感情を変えることができた。色々な表現方法が持つ強さを感じた。
- ・今回のワークショップを通じて、自分が少し成長したと感じた。今までの疲れを癒すことができ、自分のアイデンティティをより考えることができた。心理学で歴史をいかに癒すことができるかと思ったが、この方法を通じて可能性があることを感じた。
- ・自分の苦しい感情がここで明るくなり、より希望を持つことになった。
- ・今まで心理療法に対して不信感を持ったが、今回の参加を通じて、心理療法、あるいは心理学的方法の重要性を感じた。自分も少し変わっているところを感じた。日本人たちが深く思った苦しい重さをこれからおろしながら、いい関係が作られることを望む。
- ・自分の変化が波のようになっている。一番の下は穏やかな気持ちであるが、上の場合は、まだ複雑な感情がある。
- ・しみじみと戦争の残酷さを感じた。戦争のつらさを自ら経験するようになった。戦争がもたらした苦痛、被害を戦争の加害者が感じる必要がある

であると考える。

- 以前は戦争の歴史体験に対して、あまりに良くない感情を持ったが、今度のセラピープログラムの体験を通じて、戦争の歴史についてより強く伝えること、子どもたちに歴史をはっきりと教えることが必要であると感じた。
- ボルカス先生の魔法のような HWH プログラムの使い方をどう活かすのか、国境を越えて人間と人間の繋がりや強さをより強く感じた。
- 和解のための市民活動や歴史学会などのいろんな中日交流に参加してきた。心理学的な方法で歴史を感じる交流のワークショップは初めてである。みんなが一緒に力を合わせて参加している姿を見て感銘を受けた。自分から感じた収穫的な成果をより広げることが必要である。中国人でも日本人でも歴史の中に同じところがある。つまり、人間の優しさや平和の望みを持っている。歴史トラウマを持っている多くの人々の体と心を癒すためにこのようなプログラムが続いてほしい。と意見を提示した。

次に、日本の参加者からの評価においては、

- 今まで何もなかったものが、何かが生まれたような気持ちになった。つまり、新たな世界が生まれたように、内面の変化が少し感じられる。
- このセミナーを通じて自分の感情を伝えるようにすることが重要であると感じた。
- 戦争歴史は知らないからわからないというのが言えなくなった。知ることの大切さを伝えていこうと思った。
- この場所で行った交流、出会いの時間の流れを通して、セラピープログラムの効果を感じた。心が穏やかになっている。
- 今まで学ばなかった歴史のつらさをここにきて学ぶことになった。
- 中国人の優しさを感じ、アメリカに不信感を持っているお母さんに今回の経験を伝えたい。
- 自分の心からの謝罪ができて嬉しい。南京について本や資料を通じて学んだが、直接南京に来て、中国人たちと出会いながら、話し、学ぶことで、直接体験の重要さを強く感じた。
- 人と人との触れ合いができることを学んだ。互いに感情のつながりができ

ることを感じた。

- 加害としての歴史事実と向き合うことができた。日本人として責任を持って生きていこうと感じた。中国人たちが体や心から表現してくれる姿を見て感謝の気持ちである。
- 互いの感情が様々な表現を通じて呼び起こされてきた。日本にこのような感情を持ち帰る。
- 和解の希望を持つことができた。

以上の中国と日本からの全体的な評価が示していることは、歴史の直接的体験の重要性である。直接体験を通して、歴史を自分のものとして受け入れるようになっていく。体験を通じて互いに共有し、共感が深まり、関係がより深くなる過程を重要視したい。国際的な交流のような体験学習の場合は、現実的に言語の壁もあるが、これを文化、芸術的方法で乗り越えることができるだろう。

人間が偏見と民族の問題に対して、被害も加害も含めていかに深い経験を持っているかということは平和教育の体験学習の中で非常に重要である。平和教育には、平和な世界創造の主体形成として人間を育てるという役割を通じて、特に人間性喪失、暴力的問題を解決するための方法を提供する責任がある。

今回の国際セミナー参加者は、中国における戦争歴史のトラウマだけではなく、日本国内社会でも、まだ歴史のトラウマによって、苦しみ生きている在日朝鮮人や中国人、あるいは在日外国人がいることについてより深く考え、彼らと共に生きていく道や方法を探さなければならないという課題が残っている。

私たちは今、この瞬間、過去も未来も同時に生きねばならない。過去と現在、さらに未来が一つになって統一されるときに、新たな生命は実現され、歴史は新たに創造されるのである。人間は自分の中に無限の過去と未来を抱えている。その際に、歴史に対する人間の責任の探求と主体的実践を行うことが重要である。新たな歴史の生命は単に与えられるものではなく、それぞれの生の中から生まれるものである。歴史生命の道を行くことは自ら動くことである。例えば、不正や抑圧のような暴力の前で、自分から立ち上げることが重要である。すなわち、抵抗する意識と行動の実践が重要であるといえる。それが真の平和を創り出す一歩なのである。

南京記念館にある歴史のメッセージの中でミニー・ヴォートリン (Minnie Vautrin) が1937年12月16日の日記に書いた内容を見ると、「おそらく、ありとあらゆる罪業が今日この南京で行われたであろう。軍事的観点からすれば、南京攻略は日本軍にとっては勝利とみなせるかもしれないが、道徳律に照らして評価すれば、それは日本の敗北であり、国家の不名誉である。このことは、将来中国との協力および友好関係を長く阻害するだけでなく、現在南京に住んでいる人々の尊敬を永久に失うことになるであろう。良識のある日本人が南京で発生していることを知ったらよかったのに…(from [America] Diaries of M. V.)」とある。

これは、戦争からの勝利とはありえないことであり、戦争が犯した罪と暴力のトラウマは永遠に残るものであることを言及している。戦争の加害者と被害者が直接出会い、学びを続けること、自らの周りにある戦争の加害と被害についてより深く知ること、伝えること、平和の活動をする必要があるといえる。

過去があって今日の私があり、過去の問題を清算するか、償うかは、今生きている私たちの役割である。戦争歴史からの傷あるいはトラウマを癒されず、苦しい生活を送っている人々、痛ましい過去を引きずっている人々にとって、戦争歴史は現在の問題でもある。つまり、過去の歴史は今も現在進行形である。

悲惨な戦争の被害を繰り返してはいけないという観念に陥っている日本は、果たして、何をしてきたのか。戦争から60年間以後も総体的に日本が戦争責任に対し怠ってきた原因をより明らかにすることが必要であり、マスメディアと教育の右傾化に対して、敏感に反応し抵抗する自覚の意識が必要である。過去の歴史が、何も正しく解決されないまま、時間だけが流れて戦争体験者や生存者たちはどんどん亡くなっているが、平和を望む良心的な人たちは今も闘っているのである。日本が真の戦争責任と公式謝罪、そして戦後賠償を平和的に実現させるためには、市民たちの連帯的な力を合わせて闘っていく必要がある。この戦いは、今日も世の中で起きている戦争や暴力を取り除き、真の平和を実現させるための一歩であるといえるだろう。

近年、日本の戦後平和教育を批判している右翼の保守論者ら、特に、「自由主義史観歴史」や「新しい歴史教科書を作る会」のメンバーである高橋史朗や藤

岡信勝らの平和教育批判をみると、彼らは、戦争の悲惨さと残酷さばかり教える「反戦平和教育」の形が深刻化していると主張し、日本の平和教育というのは、感性や感情を刺激する教育だという。戦争のネガティブな面ばかりを人々の感情に訴えるだけで、戦争の原因を科学的に認識させるという視点は全く欠落してしまっている。こうした弱点を乗り越えるためには、「反戦平和教育」から「平和共生教育」のような「多文化共生教育」や「環境教育」、あるいは「福祉開発教育」のような教育に転換することであると提示している。

なぜ、高橋のような保守派自由主義史観研究者たちは、「反戦平和教育」自体を否定するのか。彼らは、特に従軍慰安婦強制連行や南京大虐殺などを「虚偽の歴史像」として、日本の加害歴史を示すことを自虐的・反日的と捉えている。従って、日本の侵略と加害を背景に退かせるためには、戦争の悲惨さを内容とする事に消極的にならざるを得ないのである。そのため、彼らは、日本の加害、侵略の歴史を教えること自体を否定しているのである。さらに、彼らは、軍事力を現実的な選択肢として容認、あるいは積極的に肯定評価をしている。

平和教育は、戦争の悲惨さを教えることを退けることはできない。戦争の悲惨さをどのような方法で教えれば、反戦の主体形成に繋がるのかという観点が必要である。実際、戦争の問題をどのように位置づけるかを明らかにしなければ、平和教育の固有性は見失われ、平和教育の存在意義が解消してしまう部分もある。反戦平和教育と環境、福祉、人権、などがどのようにかかわるのかという点を明らかにしながら、平和教育の全体的構造を明確にすることが必要である。戦争の問題は平和教育の中の非常に重要な要素である。戦争の問題に焦点を当てたとしても、必然的に暴力の様々な問題との関連性をみるよう展開せざるをえない。

平和教育においては、人間の内面や身近な問題と戦争の問題をどう結んでいくかということが必要である。とりわけ、戦争の問題を自分の問題として捉え、遠くの戦争で苦しんでいる人々と、目には見えない様々な暴力に曝されている今の世界に住む自分たちが直面する共通の課題を、どのようにして克服できるかという方法、あるいは道を探求することが要求される。

日本の平和教育において、過去の戦争歴史に関する学習や研究は不可欠である。特に、アジア諸国の人々と心を未来に向かわせる交流を図ろうとしたとき

に、過去の戦争歴史に関する認識、とりわけ日本の加害責任の問題に対して自覚的でないままで良い関係を築くことはできない。

家永三郎は、「歴史から学ぶことのない人は、その歴史を再度生きることを運命付けられている」と歴史教育の重要性を強調したことがある。歴史の事実や真実を知り、伝えるのは歴史教育と平和教育の重要な責任である。歴史的真相を相対化するのはいけない。

今日、歴史的事実や真実を隠蔽し、悪い行為を犯す政治、社会、思想の問題を解明し、特に戦争歴史に対する責任を負うことができる平和教育の方法がより必要であり、要求される。

参考文献

金恵玉著「平和教育の理念と教育実践の課題—コスタリカの平和教育の事例から」『平和をつむぐ思想』、唯物論研究年誌第13号、青木書店、2008年。

高橋史朗著『平和教育のパラダイム転換』、明治図書、1997年。

日中韓3国共通歴史教材委員会編『未来をひらく歴史—東アジア3国の近現代史』、高文研、2005年。

日本教職員組合教育文化政策局編『もうひとつの「平和教育」—反戦平和教育から平和共生教育へ』、労働教育センター、1996年。

中国南京国际研讨会会议报告

《回忆南京 2009- 战争创伤对下一代的影响并探讨达成和解的可能性》

金 恵玉

本作者于2009年10月6日(周二)—11日(周日),参加了在中国南京师范大学举办的主题为《回忆南京 2009—战争创伤对下一代的影响并探讨达成和解的可能性》的国际研讨会。之所以参加本次研讨会,是因为2007年本人加入